

029

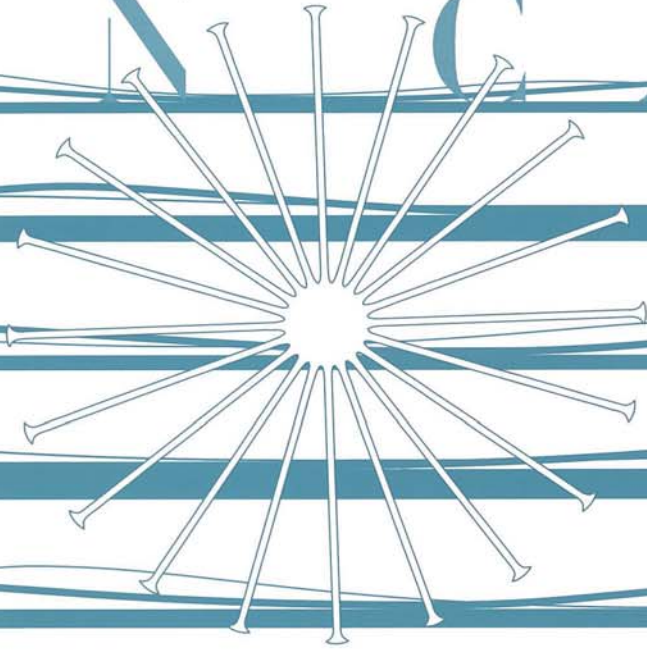
After Century

Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design



O P E N I N G C A M P U S



平成25年度

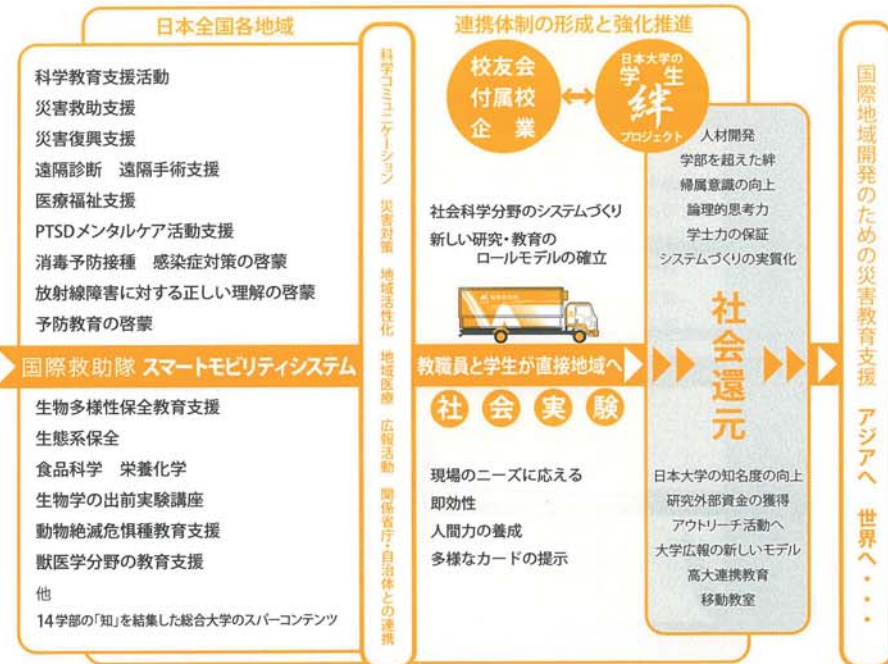
日本大学学長特別研究

N.(エヌドット)国際救助隊による 災害復興、教育支援のための 学生絆プロジェクト

研究の目的と意義



総合大学日本大学の
豊富な人材の専門性を
社会に還元する



この研究プロジェクトのタイトルを見て、なぜ芸術学部が?と疑問をもたれる方が多いと思います。芸術学部で開講しているサイエンスコミュニケーションという手法で、日本大学の「知」を俯瞰で探求し、社会還元できるコンテンツを掘り起こし、その研究者や学生たちと新しい還元の方法を考え、実践し、地域の災害復興や教育支援に世界の舞台で貢献できる人材を育てることにコミットした、ちょっと変わった研究プロジェクトです。

東日本大震災から2年以上が経ち、日本ではまだまだ被災者の支援、復興が思うように進まない中、地球全体に変動が起こり始め、世界中で多発する巨大地震や南海トラフの危険性、それに連動した火山爆発などが日本人はもとより、世界中の人々の脅威になっています。原発問題からは、科学への不信感が益々高まりました。科学は万能でないことが証明されたと言っても過言ではありません。明日は我が身であることを、常に考え、準備しておかなければならないときが来ています。

この研究プロジェクトは、科学そのものだけでなく、市民に新しいライフスタイルを提案し、リスクに対して正しい反応ができるように日本大学の「知」を共感と共有のコミュニケーションとして提供し、地域性に応じた災害対策や地域の活性化、地域医療や遠隔医療、代替エネルギー開発や教育のロールモデル確立につなげていきます。

国際救助隊は、世界の舞台で社会貢献できる人材のユニットです。1965年にイギリスで放映された人形劇、国際救助隊サンダーバードから発想した呼び名です。

この研究プロジェクトの国際救助隊が行うことは、新たな科学技術の開発や仕組みづくりのような専門研究ではなく、社会科学分野で扱われるシステムづくりと社会実験によって、社会還元というゴールにつなげる成

果を目標にした教育研究です。すなわち、日本大学の「知」である研究・教育活動の成果と、その豊富な人材や専門性を、「災害復興支援」、「医療福祉支援」、「教育支援」という3つの柱で教員が直接地域に赴き、学生たちと協働で実践し、その姿を地域の青少年に体感させるというものです。



国際救助隊 NIHON UNIVERSITY N. RESCUE

この研究プロジェクトの国際救助隊スマートモビリティシステムは、災害時の救援や復旧支援のための装置、医療支援や教育支援のための機材を搭載して被災地や遠隔地に赴き、現地で迅速な活動ができるよう荷台部分を改造した13.7tのウイングオープン型トラックと、それらを合理的に運用するための管制システムを含めたものの総称です。

これらを投入する際の合理的な交通計画などの運用管理方法を検討し、陸路が断たれた場合の空や海からのアプローチも考え、水上飛行機の実験飛行を行なう予定です。ロジスティックスの可能性は、物流会社との

産学連携で行なう計画です。例えば、生物資源科学部による生物多様性保全や生態系保全、その健全化の教育支援や食品科学(発酵食品など)、栄養化学、生物学の出前実験講座の教育支援活動、それから動物の絶滅危惧種や獣医学分野の技術や知識の教育的支援ができます。

全国に展開する100万人の校友や付属校を活用した社会還元プロジェクトでは、災害救助機器システムや教育支援システムの開発で社会実験を行います。これは、理工系、歯科医師系、文系が横断的に連携できます。

医学部を中心に、PTSDに対するメンタルケア活動や正しい手洗いとうがい、消毒予防接種などによる感染症対策の啓蒙と放射線障害に対する正しい理解と予防法の啓蒙が大変効果的です。そして、平時の小中高生への最先端の科学技術を中心とした教育支援活動ももう一つ大事なこととなります。

大学にいて研究や教育を広め、そして支援を行うには限界があります。特に一般市民や地域の子供たちに向けたアウトリーチ活動を大切に、還元することが重要です。日本大学は各学部に距離はあるものの、校友会やOB/OGの経営する企業、付属高校が全国に数多く点在していますので、これをフルメリットに変え、活用できるシステムを構築していきます。

こういった社会実験を行うことで、日本大学の「研究成果の社会還元」と「国際社会で活躍できるようなコミュニケーション力のある人材育成」が可能になると確信します。

このスマートモビリティシステムが全国を走り、社会実験している姿を想像してみてください。日本大学の教育支援による広報効果と活動広報のインパクトは計り知れない社会効果に結びつくでしょう。

研究代表者 デザイン学科教授 木村政司



スマートモビリティシステムのラッピングデザイン案

研究目的



国際救助隊

被災地や遠隔地での円滑な支援活動を実現するための「スマートモビリティシステム」の開発と運用



「研究成果の社会還元」「国際社会で活躍できる人材育成」
社会実験

社会科学分野のシステムづくりと最先端科学技術の研究・教育活動の成果としての日本大学の「知」を科学コミュニケーションの手法によって日本全国に還元していく

今しかできないことを。
今しかできないものを。

彼女たちはなぜ平坦な道ではなく、でこぼこ道を選ぶのか。

それは、大学生活で学んだ証を、本気で残そうと思っているから。

だから苦しみ、悩み、考え、立ち止まりながらも、また歩き続けるのだ。

写真学科 4年

中村 茉優さん



■ 様々な活動を通して、写真の魅力に触れる

新潟県十日町と津南町から成る越後妻有地域の里山を舞台に行われる、アートの祭典「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」。この祭典はアートを媒介とした地域住民との共働、地域再生を目的に2000年から3年ごとの夏に開催されており、世界から、日本全国から団体や作家が集い、里山をアートでつむむ一大イベントである。

日藝も第三回目から美術学科彫刻コースの学生を中心に、洋舞、日舞、彫刻、写真などの有志が参加。中村茉優も昨年参加し、写真学科の有志とともに日藝生の活動の記録写真を撮るかたわら、舞台となった星峠の住民たちのポートレートを撮り、1枚長さ2mほどの作品を公民館の外壁に貼り、好評を得た。

中村が写真を撮り始めたのは、高校3年の時。当時、部活でコンテンポラリーなどの踊りに触れ、舞踊関連の大学を目指していたが、受験指導を受けていた先生に“写真も撮ってみては”と勧められ、それがきっかけで写真学科に入学することになった。大学に入って本格的に写真を学び、撮ることに魅せられた彼女は、3年前から洋舞コースの卒業生の自主公演の舞台写真も手がけ、公演前にロビーで写真を見てもらおうという写真と踊りのコラボ企画も続けている。



「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では、中村たち写真学科有志が撮った地元の人たちのポートレートがひときわ目を引いた。

■ 作家として、この世界で

芸術祭での活動の撮影、舞台写真の撮影。記録写真を撮る一方で、彼女の中に作家として作品を創りたいという思いが芽生えた。「3年の6月に初めて個展を開きましたが、その時のタイトルが“生きていく”。この頃から作家としてこの世界で生きていきたいという思い、覚悟が決まったような気がします。

作家への夢をかなえるために、中村は一步步歩き始めた。3年の1月にはグループ展に作品を出展。さらに4年の5月には2回目の個展“在るということ”を開いた。

2回の個展に出展した作品は、ほとんどが風景である。記録写真を通して人物を撮ってきた彼女は、今なぜ風景を撮るのか。その理由を彼女はこう答えた。

「ポートレートも撮らないわけではありませんが、私は人物を撮るのが苦手なんです。人物を撮ると、そこに自分が写ってしまう。それが怖いし、それを含めた様々な意味でポートレートは本当にむずかしい。その一瞬に責任を持ってないんです。いちばん自分が素直に、裸で向き合えるのは今は風景なんだと思います。」

■ 写真を通して、本当の自分と向き合う

グループ展に出展した作品は、勢いよくコップに注ぐ水があふれ出る様をイメージ的に表現した一枚。「誰かという時と一人の時の自分はまったく違う。対する相手によっても常には変わる。時々、自分は水のように形がないのかもしれないと思うんです。」

小中高と一貫教育の私立校に通った中村は、親の理想通りになるうと努め、理想化された自分自身を演じてきた。「それに気づいた時、自分を自分で1から構築しなおしたいと思いました。写真を撮るという作業は、自分自身と向き合うということ。私の撮る写真は原風景のようだとよく言われますが、たとえ自然を撮ってもそこには自分がある。自分と向き合うことは苦しく、つらい作業ですが、いつかはそこから先に進まなくてはと思っています。」

“在るということ”と題した個展は、本質的な自分の存在を明らかなものにしたという彼女の思いも宿っている。すべて川べりの風景写真。「遠くにビル人も写っていますが、本当は人や人工物はできるだけフレームから排除した写真を撮りたいと思いました。そうしたものがちょっと入っているだけでも現実も思い起こさせてしまうからで、構図の一部として人や人工物を入れ込むのは、私の求めているものとは違うからです。」

自分を構築し直すという中村の思いは、まだ実現していない。写真を撮り、自分と向き合うことによって本当の自分に出会った時、中村の作品はどう変わるのか。それはまだ、彼女自身もわからない。



一枚の写真。その向こうに見えるもの。

第二回目の個展となる「在るということ」は、2013年5月20日から26日まで東京・京橋の「Gallery K」で開催され、多くの人が訪れた。

文芸学科 3年

永沼 絵莉子さん



■ 書くための基礎を磨いた高校時代

永沼絵莉子は言葉の世界に生きている。文字をつむぐことが好きで、ファンタジー風の小説が書きたい時はその分野の本を読み、話題の本があればどこがおもしろいのか徹底的に分析し、アニメや映画を観る時でさえ、自分だったらこうするのにと考える。すべては“書くために”本を読み、アニメや映画を観て、そこで見聞きした要素を自分の中にひとつ残らず取り入れているのだ。

彼女がここまで書くことに夢中になったのは高校時代。文芸部に入った時からである。福島県いわき市にあるその高校の文芸部は、短歌や俳句、詩、小説などそれぞれの分野で行われる文芸コンクールや県の文学賞で毎回優秀な成績をおさめる、全国でも屈指の強豪校

である。特に文芸部誌の部門では15年以上連続して賞を獲得。先輩たちから受け継いだ伝統を守り、部の実力を高めるために部員一人ひとりが切磋琢磨していたという。永沼も高校に入学してすぐ、県のコンクールに参加。短歌で優良賞、俳句で優秀賞を獲得した。「あの頃は、部の成績をあげるためにとにかく賞が取りたかった」と当時を振り返る。

日藝に入学してから久しぶりに地元のいわき市が主催する「吉野せい賞」で奨励賞を受賞。さらに青森県の企画集団ぶりずむ主催の「ゆきのまち幻想文学賞」にも応募し、入選を果たした。今も受賞したいという気持ちは変わらない。だがそれは部のためではなく自分のため。「書き続ける自信を得るためにも賞は取りたいですね。」

■ 何を書きたいかが見えてきた

大学に入ってからコンクールで受賞したものの、まだ大賞は一つとして取っていない。「いつも二番手なんです」と言って笑いながら、その理由について「短歌や俳句、詩、小説などいろいろ書いてきましたが、何を書か絞りが切れていなかった」と分析する。

書くことに対して貪欲な彼女は、詩も書きたいライトノベルも書きたい、純文学も書きたいという気持ちがあり、これだというジャンルがなかなか絞り切れなかった。ゆえに授業の課題で小説を書く時、ストーリーの展開もギリギリのところまで自分を追い込まず、無難にまとめてしまうことが多かったという。そんな時、脳裏に浮かんだのは“人がジャンルを選ぶのではなく、ジャンルが人を選ぶ”という先生の一言だった。大学での受賞はすべて小説。「最近やっと、小説が書きたいと思うようになった」と彼女は言う。

高校時代、書くことが苦しい時もあった。しかし今は「自分で書いて楽しいものを」と思うようになってきた。いま、永沼が書きたいのは“現実足につけたファンタジー小説”。単なる夢物語ではなく、日常の暮らしの中で起こるちょっと変わったこと、である。「簡単に読めるものは簡単に忘れられてしまうので、読みやすく、ポップでわかりやすいけど、読んだ後にちょっと何かが心に残る……そんな小説が書きたいですね。」

■ 残りの日々を悔いなく過ごす

言葉の世界に浸り切っていた高校時代、母親と共通の話題が見つからず、家にいる時は部屋に籠っていた。「両親ともに本を読むタイプではなかったし、母はイケイケ系だったので私が話をすると“どうしてそんなに暗いこと言うの？”“あなたのことはよくわからない”と言われました。」日藝にも家族の反対を押して入学しただけに、大学時代に何かを残さなければというあせりもある。「いま、大学では就職講座も開かれています。家族のためには就職をきちんと考えたほうがいいのですが、まだ書きたいことはたくさんあるのに、大学が終わっているの？就職しているの？という思いもあります。」永沼の頭の中には書きたいことがたくさんある。大学生生活もあと2年。その間に、卒業後も書き続けていくだけの自信を一つひとつ積み重ねていくことが、彼女にとって何よりも大切になるに違いない。

大学に入り、一人暮らしを始めてから、母親が時々上京し、話をすることが多くなった。「以前はまったく本を読まなかったのに、実家に帰る度に本が増えているんですよ。反対しながらも理解し、応援してくれる家族のためにも、自分自身のためにも、永沼は残りの日々を悔いなく過ごしたいと思っている。」



文芸学科で行われた「ゼミ雑誌のための展示会」のイベント「オープニングトーク」では、先生や先輩方とトークショーを行った。

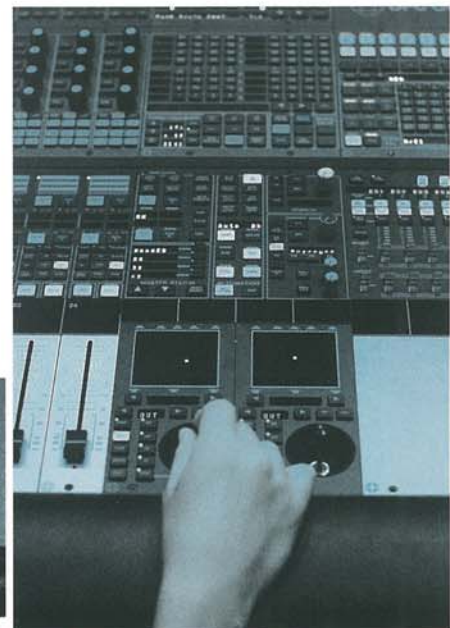
見て! 聞いて!
体験しよう!
写真学科!!
愉しく写真を感じてみよう。



よ~い、スタート!

いつでも見に来て→ [映画学科PRビデオ上映]
やっぱり聞きたい→ [進学相談コーナー]
在学生が案内します→ [施設見学ツアー]
聞いてからでも遅くない→
[映像表現・理論コースでは何を学ぶか]
観なければ始まらない→ [作品上映会]

カット!!



海の日

演劇学科ってどんなところ?
何を学べるの?
そもそも演劇って…?

難しいことはありません! あなたのその疑問、
オープンキャンパスで解消しましょう!
演劇学科ではガイダンスや個別の進学相談会に加え、
劇作・演出・演技・装置・照明・日舞・洋舞・企画制作の全
8コースでそれぞれ模擬授業・公開講座を開講します。
普段知ることのできない演劇学科の授業を楽しく体験してみませんか?
※各「模擬授業」「公開講座」については先着順に整理券を配布します。お早めにお越しください。



編集の方法教えます
(小説の書き方も教えます)

文芸学科では公開授業「作者と読者の間にあるもの~2010年代出版・編集のリアル」(青木敬士先生)、体験講座「パソコンで雑誌を編集してみよう」(谷村順一先生)といった「編集の方法」を中心としたラインナップで受験生の皆さんをお待ちしています。もちろん公開授業「文学の生まれる場所」(稲葉真弓先生)では小説の書き方も教えちゃいます。西棟5階文芸ラウンジではゼミ雑誌や実習誌の展示・配布も行っています。ご来場をお待ちしております。



美術学科ではワークショップ、進学相談会の他に公開講座を行います。

ロダン美術館再訪 / 13:00 ~ 14:00

内容: 彫刻家ロダンの美術館がフランスにあります。

このパリとムードンにある美術館を訪問する仮想ガイド・ツアー。作品、石膏原型、建物、風景、墓などをスライドで紹介・解説します。

担当教員: 高橋幸次 (教授)

場所: 西棟3F

美術学科多目的室



絵画、彫刻コースの進学相談コーナーは10:00~16:00まで行われており、あわせてアトリエの公開や工房の案内も随時行います。ワークショップは絵画、版画、彫刻と3つの専攻に分かれて行います。それぞれの専攻に迷っていてもワークショップに参加してみると意外な自分の特性を発見できるかも知れません。朝から夕方までどっぷり美術学科に染まってみてはいかがでしょうか?



音楽学科では、専任教員による進学相談コーナーで、入学試験や授業内容、進路など、皆さんの質問に応じます。

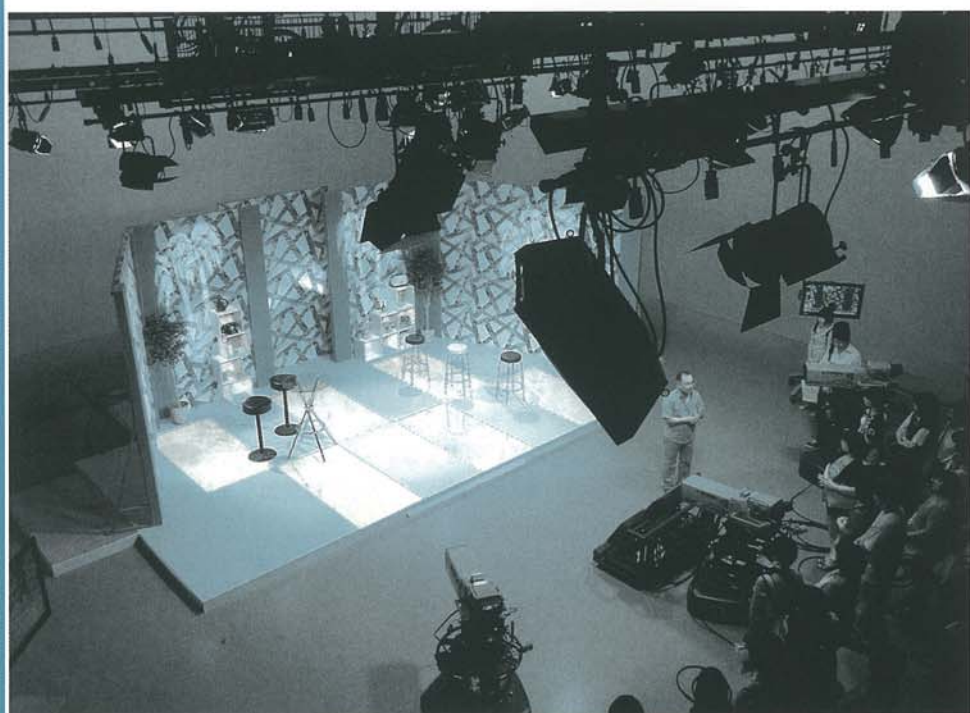
またコンサートとして「作曲コース作品発表会」「吹奏楽」「室内楽」、公開講座として「作曲家を目指そう!」「音楽療法とは」「音楽の先生になるには」「ピアノ演奏論」、公開演習として「オペラ」、レッスンとして「ワンポイントピアノレッスン」、展示として「卒業作品・卒業論文展示」「情報音楽コース『ギャラリー-SWITCH2013』」、公開ゼミナール「情報音楽コース『トークバトル2013』」など、多彩な企画を用意しています。音楽学科の魅力を楽しみながら体験してください。



オープンキャンパス!

スタジオ見学、模擬授業、進学相談、学科ガイダンス。盛り沢山のコーナーを用意しました。放送学科スタッフ全員生出演でお待ちしています。

公開! 生放送!



デザイン学科 オープンキャンパス情報

デザイン学科、そしてデザインの世界を知る特別な一日。新しくなったデザイン学科の紹介、デザイン学科講師でもあるプロのデザイナーによる特別授業、学生作品の展示、施設見学ツアーなど盛りだくさんの学科独自企画を展開します! もちろん、入試についても、全体説明会、専任教員による個別相談、デッサン指導など終日開催! 受験生のみさんの質問に丁寧に時間をかけてお答えします!



卒業生一人としての経験から。

程 藜 ○ デザイン学科 平成12年度卒
(株)日本デザインセンター・グラフィックデザイナー



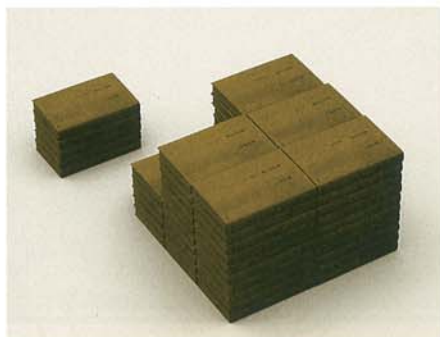
卒業して本格的なデザインの仕事が始まってから、10年がたちました。振りかえって見るといろいろな仕事をしてきました。学生時代は、誰もが知っている大きな仕事にばかり注目していましたが、いつの間にか小さな仕事に魅了され、その仕事をやり始め、それが意外にも結果とつながっていました。大きい仕事は、もちろんそれなりの達成感がありますが、地味だけれど小さな仕事こそ、自分の考え方を発揮できる一つの場所だと思います。

最近「魯迅の言葉」という本を作りました。日中共同出版で出した小さな本でしたが、装幀、紙選び、印刷など、一工程ずつ念入りに、句読点のバランスまで徹底的に、丁寧に作り上げました。見た目は極普通の本ですが、本のもつ重量感や紙質がうまくマッチした仕上がりとなりました。

この本は、賞に選ばれ、タイポグラフィが完璧だと評価してくれました。とても意外でしたが、このような小さな仕事で、些細なところに着目してくれたのは大変ありがたいことです。このことからデザインというのは、表面的で奇抜なものばかりではない、小さな仕事でも、丁寧に完成度を高く作っていくことが、とても大切なことだと思います。

デザインの世界では、あらゆる説が飛び交っています。「プレゼンテーションがとても大切で、時には難しい言葉を使って、格好をつけるのも必要なこと」など。しかし、私は外国出身で、難しい言葉が苦手でしたが、私が思ういいデザインは、「言葉のいらない、無理なく自然に流れ出すもの」だと思います。作品を作っている時の気持ちは、作品からは見えないものなので、楽しい気持ちで作ってあげれば、自然に楽しい作品になるし、自分が持っている感性や直感こそが、自分のデザインの本質だと思います。これは学生時代からそれぞれみなさんがもっているものだと思います。その感性や直感を大切に、仕事とうまく繋がってあげれば、より豊かな世界が待っているでしょう。私はそうしてやってきました。これからもやっていくつもりです。

以上は私の経験で一つの例にすぎないですが、どうぞ、自分を信じて夢を追いつづけてください。楽しみにしています。



「魯迅の言葉」平凡社
日本書籍出版協会理事賞 文学・文芸(エッセイ)部門/アジアパシフィック出版協会図書賞 金賞/ドイツ・ライプツィヒ「世界で最も美しい本」コンクール 銀賞受賞

芸術家を志すみんなへ

三戸 勇氣 ○ 音楽学科 助教



皆さんは、「フレデリック」という絵本を読んだことがあるでしょうか？絵本という子供じみていると思うかもしれませんが、この絵本は大人が読んでも、考えさせられるものになっています。

ストーリーは、ネズミ達が、冬に備えて食料を集める中、フレデリックというネズミだけは、働かずにフラフラしているというもの。それでもフレデリック曰く、冬に備えて何かを集めているというのです。やがて冬が訪れ、ネズミ達が集めた食料が尽き、みんな悲しく寂しく不安になります。心まで乾いてくるのです。そんな時、ネズミ達は、フレデリックに夏の間に何を集めていたのかを聞きます。するとフレデリックは、今まで集めていた「話」を始めます。その話を聞いて仲間のネズミ達の心が温かくなるのです。彼は詩人だったのです。つまり、彼は食料ではなく、言葉によって、みんなに幸福をもたらしたのです。

この物語は、もちろん人間社会に置き換えられるものです。人間はそれぞれ役割があり、各々がいろんな形で社会に携わって、お互いを支え合って生きています。人はそれぞれ、別の生き方や考え方、価値観を持っていても、何らおかしくないのです。

芸術家を志す皆さんも同様です。それぞれの価値観で生きていけば良いと思います。芸術は、人間の生命には直接関わりがないかもしれない。しかし、間違いなく人間を豊かにしてくれるものです。皆さんも、今はまだ学生で、いろんな人の支えの中で生きています。そんな皆さんが将来、多くの人の心を温かくするような、作品を生み出すことを願っています。最後に作曲家シューマンの言葉を皆さんに送りたいと思います。「芸術家の使命は、人間の心の奥底に光明を与えることである。」

「出会い」を大切に!

笹井 祐子 ○ 美術学科 准教授



誰に、何に、いつ、どう「出会う」かによって、生きる方向も姿勢も質も大きく左右される。とりわけ「学ぶ」ことや「創る」ことに、「出会い」は決定的な力を発揮してきた。

私にも実にさまざまな出会いがあった。

多様な出会いを噛みしめて反弱し、また反発や抵抗もしてきた。そういうこと自体が「学び」となり、「創る」ことへの誘導となった。私にとって今もなおずしりと重い出会いは多いが、そのうちのひとつ、まず、ものとの出会い。

大学2年のときに読んだフェルナン・ムルロの『パリの版画工房』という本との出会いは鮮烈であった。そこには、ピカソやマチス、シャガールやミロなど、第一級の画家たちがリトグラフ工房の中で躍動する姿があった。画家たちと刷師との、作品をめぐる丁々発止のやりとりや合作活動があり、工房はまさに学びと創造の道場と映った。こんな世界があるんだ!絵はひとりで描くものとは限らない。超絶した技術を持つ職人との共演で石版の上から作品が生まれ出てくるのを知ったとき、身体がゆらぐような興奮を覚えた。この本との出会いが版を使った創作へと私を誘い、今日の私へと決定づけた。

もうひとつは、ひととの出会い、そのひとの作品との出会い、そして場所との出会いである。私は今、メキシコを多くの学びと創作のフィールドとしている。メキシコとの出会いのきっかけとなったのは、吉田穂高先生と、その作品「壁」であった。私にとって「壁」は、先生の「手の痕跡」が強く感じられ、つねに気になる存在であった。作品から作者の手ざわり、息づかい、対象への挑戦などが溢れ出、その魅力は壁のように私の前に立ちふさがり続けた。その作品の力の源泉を知りたい!その衝動にかられて私は1998年8月、メキシコに渡り、サンクリストバルからパレンケへ、ユカタン半島の遺跡をめざした。ジャングルの続く壁のような重厚な光景が私を呪縛し、先生の作品とも重なり合って、私は原初の大地に新たに生まれ出たような感覚にとらわれた。吉田先生、その作品、そして場所、それら三者が一体となって、私の中にくすぶっていたマグマが炸裂する思いがした。私にとってもうひとつの決定的な出会い、生涯つき合いの続くであろう場所との出会いである。これこそ私が全身で息ができるフィールド、足をつけて共生できる立脚地である、という決意が、理屈など吹っ飛んで心身に深くしみ込んだ。

ひとは出会いなしには成長、変容しえない。出会うものはモノやひとであり、本や作品であり、場所であり、それらとどう出会うかが生き方を決める。貧弱な出会いに豊かな学びも創作もありえない。出会いをさせるのは偶然ではない。その当人の好奇心あふれる初々しい感情とチャレンジ精神である。こだわりなく開かれた心身は若い時期の特性である。多彩な出会いができるのも若さの特権である。出会い、出会い、出会う。生きることが楽しくなり、豊かになってゆく。

親歴三年目の徒然

伊藤 暁史 ○ 事務局 会計課課長補佐



「SEISHUNの君たちへ」とのことで原稿依頼を受けたがSEISHUN時代と呼ばれる高校生、大学生の時にこれと言って打ち込んだものがない。高校生の時にはクラブにも入らず、大学生の時にはサークルにも入らなかった。アルバイトを一生懸命していた訳でもなく、かと言って勉学に励んでいた訳でもない。

今思い返せば、当時は何をしていたのだろう。就職してからテニス、スキー、スノーボード、オートバイと熱中するものができたが、そんな自分に何か教訓のようなことを伝えることができるのかと今も悩んでいる。

話は変わるが、私には今二歳になる男の子がいる。やんちゃで甘えん坊、ティッシュボックスからティッシュをなくなるまで出したり、テレビ画面をバンバン叩いたり、部屋の明かりを点けたり消したりと、まあ手の掛かること。子どもだからしょうがない。たまに相手をすれば、あまりにもかま過ぎしてしまうため、泣いて母親の所へと走って行ってしまい、どうしてよいやら途方に暮れてしまう。毎日相手をしている母親は大変だなというも思う。

「SEISHUNの君たちへ」を考えれば考えるほど自分の子が二十歳ぐらいまでどんな成長をするのだろう、どんな成長をしてほしいのかと思いついてしまう。

とにかく元気で丈夫に育ってほしい。元気であれば、なんだってできるだろう。

また、人に迷惑を掛けさえしなければ、何をやってもいいと思っている。結果がどうあれ、色々なことに挑戦してほしい。可能性は無限にある。親のせいで有限にはしたくないし、出来る限りのことはしたいと思っている。

親の期待に応えると言うつもりはない。ただ、何をしても自分の価値観を持って、決断してほしい。価値観が間違っていると気付いたら、何度でも修正すればいい。自分の人生、自分でしかコントロールできないのだ。悔いが残らないようにしてもらいたい。

段々と子どもが成長するにつれ、このような考えが無くなってしまふのかもしれない。君たちが生まれた時、ご両親も色々考えていたことだろう。「そんなこと言われても。」と言うかもしれないが、将来自分が親になってみると分かるのではないだろうか。

なんか段々とまとまりが無くなってきてしまったようだし、「SEISHUNの君たちへ」の話も何処へやら。たまには子を思う親の気持ちでも。

芸術総合講座「広告企画実務」

ACジャパンCM学生賞(最優秀コピー賞)受賞!

芸術学部には8つの学科を横断して学ぶ『芸術総合講座』が開設されている。本年度もアートマネジメント、著作権と知的財産権など8つの学科すべてに関わりつつ、さらには実社会と芸術の架け橋ともいえるべき領域の講座が開催されている。このうちのひとつである『広告企画実務』は、総合講座の開設以来続く人気の講座である。

この講座では、広告やプロモーションなどの企画・プランニングや実際に、数多くのメディアにまたがって考えるため、毎回広告業界の第一で働く方々が講師に来てくださっている。TVCM、ウェブ広告、イベントの企画やキャンペーンから広告音楽・広告写真に実際、さらには芸術家みずからのプロモーションまで、その幅は多彩。広告業界の現場からも聴講の希望がくるほどだ。



そしてそうした第一線の方々の実際の活動にふれ、学んだ能力を活かして全日本CM放送連盟やACジャパンの広告コンテストに挑戦するのもこの授業の特徴だ。学科をこえたグループでの作業を通じてアイデアを考え、企画をみがき、実際のCM制作までこなす。その成果も優秀で準グランプリを筆頭に毎年上位入賞をはたしている。昨年も「最優秀コピー賞」を獲得。8つのアートが融合する力をみごとにみせつけた結果である。

放送学科教授 兼高聖雄



▲授業は毎回実践的な内容です。めらめら
◀広告写真の第一人者 馬場道浩さん(写真学科卒)も講師の一人

インターンシップ授業

芸術学部では、企業などでクリエイティブな専門職の実務を体験するインターンシップへの学生参加を積極的にバックアップしており、就職指導講座の一環としてインターンシップ講座を開設しています。

特に写真学科とデザイン学科の3年次にはインターンシップ授業が開講されており、インターンシップに参加して一定の条件を満たせば単位として認定しています。

3年次になると専門科目もより高度な内容になると同時に、卒業後の進路や将来を見据えて学生生活を過ごすこととなります。また学内でのキャリア支援や就職指導講座も本格化します。この充実した3年次に希望する企業のインターンシップに参加することは、実社会の仕事に対する意識を高めるとともに、自分の適性や能力を試す意味でも非常にいい機会です。



▲芸術学部主催インターンシップ講座

写真学科インターンシップ授業について

2004年度より開講された単位認定型インターンシップ授業(3年生対象)も10年目を迎え、履修者総数も160名を数えます。この授業は写真制作会社・美術館・写真ギャラリー・広告写真家事務所・ホテルブライダル写真館・大規模テーマパーク・地方行政組織(写真の町)などの写真に関連する仕事先のご協力を得て成り立っています。夏期休暇中の1~2週間実務を体験し、実社会における写真の活用や使命・仕事観を感じてもらい、卒業後の進路や仕事に役立てるものです。研修後の学生は大学内では出来ない体験を通して大きな成長を遂げます。在学生や日藝に入学される皆さん、是非インターンシップを活用してみましょう。

写真学科教授 浅井 譲

デザイン学科インターンシップ授業について

デザイン学科では、インターンシップを特別演習の一科目として位置づけており、多くの3年生がインターンシップに参加しています。受け入れ先の企業としては、自動車や家電メーカーをはじめ、広告代理店や映像・コンテンツ等の制作会社、デザイン事務所、建築設計事務所、そして家具工房などと多岐に渡っています。インターンシップを通じて、プロのデザイナーから直にデザインテクニックやノウハウを修得したり、仕事に対してアドバイスを得たりした経験が、その後の創作活動や就職活動の糧となっているようです。実際、就職したデザイン学科の卒業生のほぼ8割がデザイン職として採用され社会で活躍しています。

デザイン学科准教授 長瀬 浩明

【就職指導講座「インターンシップ講座」】

就職指導課では、低学年キャリア講座から始まり、多数の就職指導講座を開講しています。インターンシップについては『インターンシップ講座I・II』を毎年5月~6月に開講しており、インターンシップの概略、業種・職種選び方や手続、選考の方法、また選考を通過するための履歴書・エントリーシートの書き方といったノウハウを専門講師が具体的に解説します。

講座のスケジュールは、就職指導課掲示板や学科の就職関係掲示板、ホームページで確認してください。

(本年度の『インターンシップ講座I・II』は5月24日・28日・6月3日・5日に盛況のうちに終了しました。来年度も同時期に開講を予定しています。)

●インターンシップの体験談について、芸術学部公式ホームページでもご紹介しています!

日本大学芸術学部TOP > 進路 > 就職 > インターンシップ > インターンシップ体験談
<http://www.art.nihon-u.ac.jp/future/job/experience.html>

(ホームページの体験談はインターンシップ授業に限らず、インターンシップ全体の体験談です。)

テノールの新星 西村 悟

私の自慢は日藝です

オペラ界期待の新人であるテノールの西村悟は、五島記念文化賞オペラ部門平成25年度オペラ新人賞、第23回出光音楽賞のダブル受賞を果たした。これまでも第36回イタリア声楽コンクールで大賞(一位)、第80回日本音楽コンクール声楽部門(オペラアリア)第一位および聴衆賞を受賞した。ポーランド国立音楽院に留学し、イタリア若手声楽家の登竜門で知られる第17回リカルド・ザンドナーイ国際声楽コンクールで2位並びに審査委員長特別賞を受賞した。イタリアのMusica Riva Festivalやカナダのモントリオール音楽祭にも招待され、活躍の場を海外にも広げている。西村は「私の自慢は日藝です。時折芸術家は変わっているものだから、変わっていなければならないと思っている方がいますがそれは違います。芸術家は自分の持っているものをよく理解しそれを生かしているだけです。これこそが個性だと思います。この個性が日藝には溢れていました。これは私が日藝で学んだ最も大事なことです。まず自分も見つめること、そして自分を信じること。このことを教えてくれる学校は、日藝以外私には知りません。自分で考え、実行する、失敗することも多々ありましたが、先生は尊重して下さいました。失敗したときや悩んだときにアドバイスをヒントを下さいました。この指導が私の原点です」と語る。2010年に指揮者の佐渡裕から「21世紀の第九」のテノールソロに抜擢され、大野和士からもブリテンの「ノクターン」Op. 60のテノールソロを指名されるなど声楽家としてのキャリアを高めている。日藝出身の次代を担うテノールである。

音楽学科教授 土野 研治



西村 悟 | Satoshi Nishimura Profile

2004年、日本大学芸術学部音楽学科声楽コース主席卒業。

東京藝術大学大学院オペラ科修了。

本文の受賞歴の他にも、第23回イスマエーレ・ヴォルトリーニ国際オペラコンクール入選、第27回同コンクール2位等多数受賞。文化庁新進芸術家海外派遣員としてイタリア・ヴェローナにも留学。2013年から再びイタリア留学予定。

写真学科

- 気鋭学生写真展二コソサロンにて開催
●平成24年度卒業・修了制作優秀作品展
●写真甲子園2013・東川フォトフェスタイベント
●夏休み・休日開催ワークショップなど

映画学科

- 中川洋吉先生がフランス政府より「教育功労章シュヴァリエ」を叙勲
●JPPA AWARDS 2013に卒業生が入賞
●J.COMチャンネルの「日藝アワー」にて放映

美術学科

- 美術学科卒業生が「ペーコン・プライズ2013」を受賞!
●長野 亘さんが「マイコレ壁面アートコンテスト」で特別賞受賞!
●N+N展 2013 「アートの思考法」を開催

演劇学科

- 「マンハッタンの太陽」 富井大裕助教
●「引込線2013」 富井大裕助教
●「開設25周年 ボトルシップラプソディー」



- 「マンハッタンの太陽」 富井大裕助教
●「引込線2013」 富井大裕助教
●「開設25周年 ボトルシップラプソディー」

音楽学科

- 演奏会のお知らせ
●第42回 サマコンサート
●第110回定期演奏会
●第111回定期演奏会

文芸学科

- 永沼絵莉子さんが第23回ゆきのまち幻想文学賞に入選!
●平成13年度卒業 佐島 佑さん(本名:池里佑介さん)が第20回「日本ホラー小説大賞読者賞」を受賞!
●「ゼミ雑誌のための展示会」を開催しました

- よしもとばなな氏が第7回日経賞受賞記念講演
●ハイナー・ゲッベルス氏(Heiner Goebbels) 公開特別講義

演劇学科

- 今年度も続々と演劇学科主催の公演が始まります。演劇・日舞・洋舞に分かれ上演致します。
●舞台総合実習III C (日舞)
●舞台総合実習IV D (洋舞)

放送学科

- 「よみがえる話芸 節談説教」が芸術祭大賞
●一龍斎貞橋さんが真打に昇進
●カンヌライオンズ日本代表に佐藤雄介さん

デザイン学科

- 第5回JPCAデザインアワードで準グランプリを受賞
●サンノゼ州立大学、デザイン学科視察記念で中西元男氏(PAOS)が特別講演

- 卒業生の活躍
●熊田綾菜さん(H22年度卒)
●深澤直子さん(H22年度卒)

College Administration Office

Table with 2 columns: 日程 (Schedule) and 内容 (Content). Includes dates for 前期補講期間, 中間試験, 前期B試験, etc.

- 芸術資料館企画展開催日程
●夏期休暇中の事務取扱いについて

編集後記

4月にデザイン学科に着任して、AC編集委員となった。デザイナーとして数多くの仕事をしてきたわけだが、今回は執筆依頼や、記事収集などの調整役だ。